



MORE THAN TOEIC

英語力の、その先へ。





「ワールドクラスへの飛躍」を標榜する本学にとってグローバル化は喫緊の課題。技術職員の外国語への対応力強化は里見ビジョンでも重点施策として掲げられています。総合技術部は2016年9月より技術職員を対象とした英語研修をスタートさせました。外国人講師による会話練習を軸とした毎週木曜日の全18回コースですが、実際にやってみてどうだったのでしょうか。受講者の感想は？ 講師の感想は？ そして主催者の思惑は？ それぞれ思うところを語っていただきました。

Discussion on
globalization initiatives

相互理解を円滑にする コミュニケーションで育む英語力

— 現在求められているグローバル化に対し、グローバル環境部会はどういった取り組みをしていますか？

中嶋隆(以下、中嶋) 2013年から5年計画で進められている里見ビジョンにおいて、総合技術部は教育と研究の技術的支援を担うため、元々あった研修部会から分離してグローバル環境部会を立ち上げました。まず各部局の状況を確認したところ、海外からの研究者や留学生の増加に伴い英語対応力の必要性が高まっていることが分かりました。これまで事務職員に対しては英語研修や海外研修が行われていましたが、技術職員に特化した研修はありませんでした。加齢医学研究所では学生・教職員向けの英会話教室を開催していたので、加齢医学研究所の協力のもと、技術職員の枠も作ってもらい、英語研修を開催することができました。また、一昨年から民間会社の技術職員向けの英語セミナーに派遣研修の取組みを行っています。

— 技術職員を対象とした場合の英語研修の目標、内容はどのように構成したのでしょうか？

中嶋 目標としては、技術職員が留学生・外国人研究者等と技術的な問題について英語で簡単な対応ができるようにすること、英語でのコミュニケーションに対する心理的バリアをなくすことなどを掲げています。研修内容はアンディ先生が工夫してくださっています。

Andreas Sjöholm(以下、Andy) この研修では、職場での基本的なコミュニケーションを学び、仕事、現場で役立つ英語を身につけられる内容にしています。今日の授業では地図を見ながら目的地までの道のりを聞いたり説明するロールプレイングを行いました。コミュニケーションを中心に据え、講師である私自身が話す時間を短くし、受講者が長く話すように心がけています。— 授業の最初にアンディ先生が投げかけた「週末の予定は？」というテーマで、受講者がテーブルごとに途切れなく会話していたのが印象的でした。受講者の様子や手応えはどうか？

Andy 皆さん最初からたいへん熱心で真面目に通って来てくれていますよ！ そう、大切なのはこの講座に毎週参加し続けることです。英語は習慣的に使っていないと少しずつ忘れてしまうので、日常的に英語で留学生や外国人スタッフとコミュニケーションできる環境が理想なんです。せめて現在は週に1回の講座が2回になると良いですね。東北大学全体のグローバル化を

真剣に考えるなら、各キャンパスにこのようなグローバルルームを設置して英語教師を配置し、学生や教職員がいつでも学習できる環境を整えることが重要です。

中嶋 今回の英語研修は募集人数を上回った応募がありましたし、部会でも将来的には各キャンパスで開講できたら、と考えています。実際に受講された方々の感想も聞きたいですね。

田澤智香(以下、田澤) この講座では全て英語で会話するので、最初はどうしても無言の時間が多かったのですが、アンディ先生から促されたりしているうちに少しずつ会話が続くようになってきました。

澤口亜由美(以下、澤口) 言いたいことがあってもなかなか言葉が出てこないんですね。それでも何か話そうと頑張っているうちに段々言葉が増えてきたように感じます。フランクで楽しい雰囲気がいじり、週に1度、仕事時間をこじ開けてまで参加しようという気持ちになります。

渡邊武(以下、渡邊) 私も最初は無言でしたが、アンディ先生が「リラックスして気楽にやろうね」と仰ってくださり、そこから少しずつ力が抜けてきました。言いたい単語が分からない時でも、その単語の意味に近いものを並べていると、話している相手が「これじゃないの？」と応えてくれたりします。コミュニケーション上のテクニックを教えてくれるから、それで「この英語レベルでもいいんだ」と思えるようになり、話せるようになってきたのかなと感じています。

佐藤寿和(以下、佐藤) 私はこの講座が好きです。アンディ先生が仰ることに全面的に賛成です。一方的にインプットするのではなく、受講者同士がお互いに会話するのは大事な事。英語も日本語も、相手がいれば相互作用があったものなので、日本人同士が英語で喋るのもいいなと思っています。ボキャブラリーが少なくても、言っていることを分かってもらうには分かりやすく説明する必要があります。英語を話す前に、言葉を分かりやすくする訓練にもなるという意味でも、コミュニケーションを中心にしたやり方は効果的だと思います。

Andy ものごとを単純に表現する技術は重要ですね。

佐藤 技術英語は単語の意味が一つなので覚えてしまえば簡単で、一般の会話の方が難しいです。そこを、他の人に分かりやすいようにシンプルに伝えていくという技術にフォーカスしているので、あらゆる場面で非常に役に立つと思います。



中嶋隆

なかじま・たかし | 電子回路・測定・実験群、ニュートリノ科学研究センター。昭和50年理学部附属泡箱写真解析施設(当時)に採用。グローバル環境部会長(H27)。素粒子実験の実験装置・機器の設計製作に従事。趣味は映画観賞。



Andreas Sjöholm (Andy)

アンドレアス・ホーホルム | 英語講師。加齢医学研究所。スウェーデン、ヘルシンボリ出身、2005年来日。英語講師の豊富な経験を生かし、2016年7月より加齢医学研究所で英語コースを主催中。趣味はキャンプ。



澤口 由美

さわぐち・あゆみ | 安全・保守管理群、理学研究科。平成22年採用。衛生工学衛生管理者、安全衛生管理実務担当。学生の頃 Absorption (吸収) を「熱中する」と誤訳して先生に特筆された程の英語センスです。



田澤 智香

たざわ・ちか | 生物・生命科学群、医学系研究科。平成23年～共通機器室実験動物病理プラットフォームで研究支援業務に従事。病理標本作製(光学顕微鏡、電子顕微鏡)を担当。趣味は手芸、英語学習は高校以来です。



渡邊 武

わたなべ・たけし | 安全・保守管理群、工学研究科。平成24年工学部・研究技術部に採用。職場巡視や機器設置届、安全・衛生管理者として防災・安全・衛生の業務全般に従事。健康の為に歩きます。英語学習は大学以来。



佐藤 寿和

さとう・しかず | 加工・開発群、金属材料研究所。平成12年採用。研究機器・試料等の製作の業務を担当。趣味はルアーフィッシング、スキー、スノーボード。9年前に英語学習を再開、永遠の英語初心者です。

技術職員のグローバル化とは？ 長期派遣、支援体制の充実も

— どのような場面で英語研修の必要性を感じて参加されましたか？ また、すでに成果を感じている部分はありますか？

田澤 私が働いている部署は毎日英語が必要な訳ではないのですが、留学生から仕事の依頼を受ける事もあるので、この研修の企画を知り興味を持ったのがきっかけです。まだまだ思うようには話せませんが、英会話への取っ掛かりをつかむことができたかなと思っています。

澤口 私も年に数回ですが外国人の先生や留学生に休憩室の説明をすることがあり、その度に勉強しようと思うものの頻度が少ないこともあって上手くいかないと感じていました。研修案内に「初級」とあり「心理的バリアをなくす」という目標が掲げられていたので参加しやすいな、と思い参加しました。私の職場には、英語ができる人たちがいる側と私たちの側と2つのドアがあるのですが、外国人の方がこちらのドアから入って来られると、私たちに緊張感が走るんです。そんな場面でも慌てず「あちらですよ」と案内することができるようになりました。

渡邊 私は安全衛生の班で、事務室がない建物なので留学生がよく訪ねて来ます。ここの鍵を借りたいとか、会議室でこれが壊れているとか、空調が効かないとか。そういった一般的な生活の中の案件ではあるものの、原因としてはテクニカルな事例を聞かれることが多いです。この研修が初級で、専門が違う技術職員に向けて募集しているということは、どこかに特化した内容ではないのだろうかと思いつつも受講しました。仕事で留学生に向けた案内標識や通知文を英語に訳すことがあり、ここで学んだ会話術を通して誰にでも通じる英語のスキルが欲しいと思っています。先日、防災訓練のアナウンスも自分なりに英語で吹き込んでみました。アンケートを取ったら「聞きにくかった」という意見もあったのですが、「なんとなく分かったし、ないより遥かに良い」という意見もあり、実際に職場でも役に立っているかなと感じています。

佐藤 機械加工の仕事では、研究者や学生の依頼でものを作ります。依頼者には日本人も外国人もいるので英語のスキルを上げたいと思い参加しました。現場で感じるのは、外国人が必ずしも英語が上手とは限らないし、こちらが理

解できない原因が向こうにある場合もあるということです。そういった場合に、簡単な英語で説明できるようにしたいなと思っています。この講座で日本人同士で単純化して分かりやすく伝えることが身についてきたようです。国際見本市の視察を国際電話で申し込み、メールで工場見学の参加登録をする機会があったのですが、スムーズにできました。

中嶋 部局には工場があり、留学生、外国からの研究者に英語で技術相談に対応してもらいたいとの要望があるので



佐藤さんのお話は心強いですね。それぞれの現場で英語研修が役立っているようでひと安心しました。

— 違う専門性の方が集まることは、英語研修において何か影響はありますか？

渡邊 一緒に英会話をしている中で、誰がどこのキャンパスでどういう仕事をしているかが段々分かってきました。この人に説明するときはもう少し噛み砕いた方がいいのかなとか、付き合っていく中でなんとなく分かってくるので、相手に合わせて話す能力も少しずつ養われているのかなと思います。

Andy 自分と同じ英語のレベルの人といつも一緒にいるわけではないので、レベルの異なる多くの人と交流し相手

に合わせて話すことは大事ですね。私は講座の中では練習相手の人を常にシャッフルするようにしています。英語レベルが高い人と話すことで初心者は上達しますし、高レベルの人は簡単な英語で表現する能力を高めることができます。これらは英語を使う実際の現場で必要とされる技術です。— 今後、グローバル化に対応する上で必要なことは何だと思いますか？

渡邊 安全マニュアルを作成する際、英語版は別に翻訳を

ても皆さんに提供したいと考えています。海外の大学で似ている仕事をしている方もいるので、英会話ができるようになったら職場をスイッチして人事交流できたらいいなと思います。将来的には、提携している海外の大学や研究所に技術職員を3ヶ月から半年くらいの期間で派遣できればと思うのですが、皆さんいかがですか？

渡邊 ここに来ている方々は行きたいのではないのでしょうか。ただ、今回の英語研修への反応を見てもグローバル化に対する姿勢は全体的に、二極化しているようでした。

中嶋 職場の環境によって長期的に行けるところとそうでないところがありますよね。その辺をサポートできれば、行きたいけれど抜けられない、という方も手を挙げられるのではないのでしょうか。佐藤さんの金属材料研究所は海外派遣を多くしていますよね。

佐藤 その点では金研は恵まれています。金研には事務職員及び技術職員を対象とした海外研修制度があります。私も2012年にこの制度を利用して、アメリカのミネソタ大学とスタンフォード大学を訪問しました。現地では機械工場の責任者の方と話をさせていただくという有意義な経験をさせていただきました。問題なのは、そういったプログラムに毎年何名か参加していますが、英語が話せない、ただ担当の後をついて回って美味しいものを食べて帰るというような、物見遊山に終わってしまうことです。やはり、海外派遣の前に基本的な会話能力は必要なので、アンディ先生が仰るように週2回、英語を話す機会を作ることはグローバル化の礎となる重要なことだと思います。

Andy これまでは「試験をパスするための英語」でしたが、これからはツールとして活用するために学習していく必要がありますね。英語はサイエンスの言葉であると同時にコミュニケーションのための言語。言わせてもらえば、英語は「TOEICの点数だけ」ではなくコミュニケーションに活用してこそ、なんです。私は加齢研に常駐していて学生や教員の英語を指導しています。「来週アメリカに行くんだけど、プレゼンテーションの練習につきあって！」と言われてたり(笑)。繰り返しになりますが、こういった英語教師を各キャンパスに配置することが必要です。プレゼンテーションの練習をしたと思ったときにすぐ教えてもらえる人が身近にいたら素敵でしょう？

(2016.12.15)

My HOME GROUNDS ③

農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター(女川) 複合水域生産システム部



石巻で上架メンテナンス中の調査実習船「翠皓(すいこう)」。この後、女川へ回航。

職群トーク

FACE TO FACE

vol.03



分析・評価・観測群

加齢医学研究所共通機器管理室

吉田裕美さん

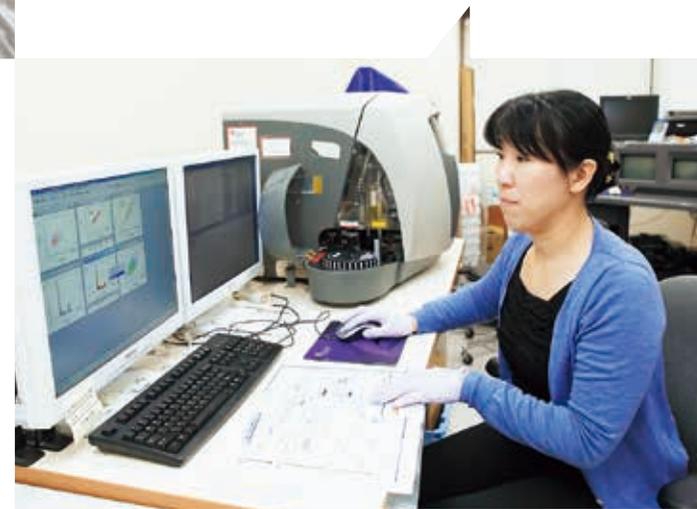
よしだ・ひろみ | 平成12年京都大学に採用、平成20年より東北大学加齢医学研究所に勤務。共通機器の保守・管理、技術サポート、依頼分析などに従事。座右の銘は、一晩寝かせてもう一度トライ。

分析・評価・観測群

工学研究科・工学部

高橋真司さん

たかはし・しんじ | 平成18年採用。大型分析機器の維持管理及びそれらを利用した元素分析等に関する依頼分析に従事。趣味はスポーツ観戦全般とバスケットボール。



電子顕微鏡、分析装置、自然観測の3グループで構成される分析・評価・観測群。学内はもちろん学外からの依頼も受け、多種多様な装置と確かな技術で、信頼されるデータを提供するとともに、日頃の技術相談等にも対応しながら、装置等の維持管理・運営を行っています。本学の理念である「研究第一主義」の礎となる各種分析機器のスペシャリストとして自己研鑽に励んでいる2人に、仕事のこと、今後の展望等についてお聞きしました。

多種多様な分析装置を使用する、計測・分析の現在

—それぞれの業務についてお聞かせください。

吉田裕美 (以下、**吉田**) 私は加齢医学研究所 (以下、加齢研) の共通機器管理室で、主に医学系、生物系の研究支援を行っています。それに関わる共通機器の保守管理、講習会や技術サポートを職員2名で行っています。

高橋真司 (以下、**高橋**) 私は工学部の合同計測分析班という部署で主に元素分析に従事しています。吉田さんと同じく共通機器を扱っていて、4台ほどの装置を担当し、学内外からの依頼分析を受けています。

吉田 利用者の割合は、所内が8割、残り2割もほとんどが学内ですが、加齢研は全国共同利用・共同研究拠点として、学外からの依頼も積極的に受け入れています。当初は研究所内に限定していましたが、平成20年から有料化し、所内、学内、学外という利用金額を設定し、サービスを開始しました。

高橋 私の部署の利用者は工学部がメインですが、理学部、医学部、薬学部、農学部など様々な学部から分析依頼があります。装置にもよりますが、試料の前処理から分析までを請け負っています。—計測や分析の機能は、今後は集約化されていく流れにありますか？

高橋 基本的には機器を集約する方向にあると思いますが、全ての装置で行う必要はなく棲み分けができればよいのではと思います。汎用性の高い分析機器などは集約し、共通化していくとより効率的な運用が可能になると思います。一方で、ある特定分野等に特化した装置や調整がシビアな装置等に関しては、専属のスタッフを配置することで装置のポテンシャルを十分に発揮できると思います。他にも、特許の関係で独立した研究室内でしかできない分野もあるでしょうし、柔軟に対応していくべきだと考えています。

吉田 特許の機密保持の観点から、データや機器を共通化できない部分は加齢研にもあります。また、稼働率の高い機器などは、

研究室で単独購入して使いたいという、集約・共通化の流れと逆行する要望も発生するかと考えられます。

分析機器のスペシャリストとして技術力を高める次のステップ

—現在の業務の中で感じている課題などはありますか？

吉田 私は以前勤めていた大学で質量分析を担当していて、今高橋さんがされているような依頼分析を行っていたのですが、その時は5、6台の機械を扱い、1つの分野を追求していたので、技術的な研鑽ができました。今は色々な機械を取り扱っているので、まだ表面的な使い方だけしか学べていない状態です。機器のメンテナンスやトレーニング、料金計算などの事務的な仕事がある中でも、もっと技術力を高めていく必要があると感じています。高橋さんが元素分析を突き詰めていかれているというのは、少し羨ましいですね。

高橋 吉田さんと比べれば元素分析という特定の分野で業務をしておりますので、集中して学んでいるかと思っています。ただ逆に「他の装置も知りたい」「この装置に対して別のアプローチを考えてみたい」と思った際には、ウェブ上で調べるくらいで実際に見たりすることは、なかなかできておりません。

吉田 他部署で同じ元素分析されている方との交流はないのですか？

高橋 現段階では、ほとんどないですね。職群ができて横の繋がりを作るチャンスは増えてきていると思いますが、実際にそれを活かしてきれていない部分があります。

吉田 近畿地区には質量分析近畿ブロック研究会というのがあり、メーリングリストで質問や悩み事を共有しそれぞれの大学を訪ねて行ったりしていました。学内や東北の他大学と、そのようなつながりが持てればいいのかなと思います。

—今ある職群内のグループの中でも、担当する装置などのカテゴリーを設けて、情報を共有できる小グループがあった方が動きやすいかもしれませんね。

高橋 100名程の技術者がすぐにまとまるのは難しいですが、10人、20人単位の小グループを明確にしてもらえるとコミュニケーションは取りやすくなると思います。—では最後に、今後の目標を教えてください。

高橋 自身の技術力向上です。依頼分析を行いながら自分自身のテーマを見つけ、分析装置を利用した成果を残すことで自分自身のステップアップと装置利用者へのアピールにつながると考えています。

吉田 分析のプロとして、より総合的に研究のサポートができるよう取り組んでいきたいです。技術を深めつつ、何をどのように使えば上手く測定できるか、メーカー等への橋渡しも含めてコンサルティング的な関わりもしていきたいです。

東北地区国立大学法人等技術職員研修の実施報告



隔年で当番校となっている東北地区国立大学法人等技術職員研修を、実行委員会を立ち上げて実施しました。この実行委員会の立ち上げは、平成32年度に開催を予定している総合技術研究会に向けた試みでもあり、研修部会と技術発表会担当部局を軸に編成し、全学的な協力体制の良い事例となりました。

実行委員会を統括班、事務局班、技術発表会班、Webサイト班に分け、各班のやるべきことをチェックリストにまとめることで、効率的で効果的な組織運営にも取り組むことができました。

東北大学金属材料研究所の松岡隆志教授による「青色LEDで知られる窒化物半導体の現状と将来」、東北大学サイバーサイエンスセンター長の曾根秀昭教授による「情報技術とネットワーク」の2つの特別講演会には120名が参加しました。

技術発表会では口頭発表が15件、ポスター発表が25件(発表40件の参加校内訳は、秋田大7件、岩手大4件、鶴岡高専1件、山形大1件、福島高専1件、東北大26件)あり、参加者数は147名で、情報交換会には74名が参加しました。実技研修では、加工・開発群9名、電子回路・測定・実験群4名、分析・評価・観測群8名、生物・生命科学群3名、情報・ネットワーク群8名、安全・保守管理群5名、合計37名(秋田大9名、岩手大3名、一関高専1名、鶴岡高専1名、宮城大1名、山形大6名、福島高専1名、東北大15名)

の方々が受講参加しました。

実行委員会委員長 猪狩佳幸
(分析・評価・観測群、多元物質科学研究所)

4名が兼務発令 — 一部局を越えた全学支援の一環 —



農学部は2016年度に両宮キャンパスから新青葉山キャンパスへ移転します。引っ越しは5ヶ月の長期にわたり、その間、両宮と新青葉山の両方に学生・職員が分散することになり、業務量も一時的に増大します。そこで近隣の星陵キャンパスにいる情報・ネットワーク群の技術職員3名と安全・保守管理群の技術職員1名を兼務発令し、農学部を支援することにしました。4月1日、農学部を訪れ今後の業務体制について打ち合わせを行った兼務職員たちは「農学部の職員になったという自覚が生まれると同時に新しい責任を感じました。農学部での経験をいまの業務にも役立てたい」と妙妙な面持ちで話していました。なお兼務は1年間です。

学内技術相談窓口の開設！ 情報・ネットワーク群がサイトを制作

総合技術部は全学的な技術支援の一環として、学内教職

員を対象とした職群毎の技術相談窓口を開設する事になりました。これを受けて、情報・ネットワーク群では技術相談を受け付けるための問い合わせフォームを総合技術部HP上に設置しました。

<http://web.tohoku.ac.jp/tech/consultation/so2/>
フォームで相談を受け付けることで、効率的に学内外のソリューションの紹介や技術的なアドバイス対応を行えるのではないかと思います。相談する職群の判別が難しい場合は「総合相談」から受け付け可能です。

また、スムーズな技術相談を行うため、職群毎に、相談内容や問合せ例も掲載しています。

このフォーム(技術相談窓口)を利用させていただくことで、全学的な教育・研究支援の役に立てばよいと考えています。

歌謡、佐々木真人(工学研究科)
一條肇(医学系研究科)

東北大学職員海外研修(中級者対象)の報告



11月下旬、19日～27日の行程でオーストラリアのシドニー大学で行われた海外研修に、事務職員6名、技術職員4名(うち施設系1名)の構成で参加しました。大学職員を対象とし、大学の国際化を図る上で重要な事項について学ぶコースです。研修プログラムはどれも興味深く、なかでも、教員と技術職員へのインタビューは、他では得難い貴重な

経験となりました。インタビューでは、外国人の同僚とのコミュニケーションの取り方や人員配置などについて伺うことができたので、これらを国際化への取り組みや組織の改善に役立てたいと思っています。また、私にとって意外だったのは、研修に参加したことにより、科学技術分野における日本の優れた点を認識し実感したことでした。私は、その日本において教育研究環境の充実した本学の技術職員なので、科学技術分野の教育研究支援に真摯に向き合い貢献したいと改めて強く思いました。

角館俊行
(電子回路・測定・実験群、多元物質科学研究所)

安全・保守管理群でも初任者研修を実施



昨年度、分析・評価・観測群は複数の部局の協力を得て初任者研修を実施しましたが、これに刺激を受け、安全・保守管理群も今年度採用された職員(1名)に対し2日間の研修を実施しました。学内で同様の業務を行っている技術職員の下で研修させることで、必要な知識を習得させ、また業務に必要な人脈を形成することが目的です。研修先は多元物質科学研究所、金属材料研究所、工学研究科、未来科学技術共同研究センター、学際科学フロンティア研究所です。さまざまな部署の先任技術職員の仕事を経験することで、視野を広げる機会となりました。

Communications Vol.03

参加者・スタッフファーストで！

東北地区国立大学法人等技術職員研修会にスタッフとして参加しましたが、組織や運営に問題があると感じました。通常、技術発表会の担当は部局持ち回りで行われていましたが、平成32年開催の東北大学総合技術研究会の準備を見越して、各スタッフの練度を上げるといった目的が加わり、確認や指示が部局だけではなく職群からも来る、といった二重の管理体制となっていました。

スタッフとして参加するにあたり、事前に簡単な打診はありましたが、総合技術部長名の委嘱状が事務的に送られてきたのと「前回の内容を引き継ぐので、例年通りの対応でよろしく」という言葉だけで、正直、途方に暮れました。まず、何をどのようにすればよいのか、具体的な指示がありません。全体の把握が不十分なか連絡が届くのは突然、指示は不明瞭な内容、さらに、部局と職群の二重体制のためか誰の責任で作業を仕切っていくのかも明確に見えず。

結局は実作業間で連絡を取り、分担決め・作業内容・計画の確認を進めていきました。研修参加者のために、厳しい期限に迫られながら作業しなければいけない場面もあ

りましたが、何とか完了することができたのは、たくさんの方の協力のおかげです。

今回特に重要だと思った事は、そもそも準備の始動が遅い中で、「例年通り」という不明瞭な指示で進んではいけないということです。新しく運営や作業に加わったメンバーに対し「例年通り」という指示だけでは、改善案を提案することも内容を精査し検討することも出来なくなります。

今後もより良い地区研修を開催し、平成32年東北大学総合技術研究会を成功させるためにも、総合技術部には、常に受講者側に立った視点での企画・運営体制作りや、現場スタッフが混乱・疲弊しないよう、早めの計画策定・適格な指示判断をするなどの「参加者・スタッフファースト」を徹底するようお願いいたします。(匿名)



技術職員 = 研究職？

入職以降、疑問に思っていることがあります。それは「技術職員って研究職なの？」ということです。

これまで、「評価に反映されるので積極的にやりなさい」ということで、「学会などで発表する」「学外研修に参加する」「業務に関連した資格を取得する」「科学研究費に応募する」などのアドバイスを受けてきました。これらは業務報告書の記入例にも見られます。しかし、振り返ってみると、

技術職員と教員のやるべきことの区別がつかないことばかりです。「これって教員の評価項目でしょ」と疑いたくなります。反対に「緑の下力持ち」的な地道な支援業務については、おもて評価項目として表には出てきません。見

方を変えると、技術職員としての本業である支援業務を行わず、自ら考えたテーマについて研究や開発を行っている技術職員が評価されることになります。これは本末転倒になっていませんか？

こういった不条理が起こるのは「東北大学における技術職員の役割(立場)が明示されていない」ためではないかと思っています。技術職員の役割がはっきりすれば、技術職員としての評価項目も明確になり、評価する側も、評価される側も納得できるようになるのではないのでしょうか。そして、技術職員ならではの支援業務で、東北大学へ、ひいては社会へ貢献することにより、やりがいと誇りを持って、業務に取り組むことができるのではないのでしょうか。

総合技術部として、ぜひ「東北大学における技術職員の役割」について、議論と検討を重ね、全教職員に宣言して、「技術職員としての立場の確立と適正な評価」へとつなげて欲しいと切に願っています。そして、職場への「不安」や「不満」ではなく、初任のときのような技術職員として働くことのできる「喜び」が取り戻せることを期待しています。(匿名)



総合技術部に関するご意見、主張、体験記などを随時募集しています。匿名での掲載も可能です。
○送り先・お問い合わせ E-mail : integ-pub@grp.tohoku.ac.jp

お手元に WAZA-ALI のバックナンバーがあれば、表紙の写真をご覧ください。
創刊号は歯車、2号は顕微鏡、そしてこの3号は保護帽(ヘルメット)でした。さて、ここで問題です。

4号の表紙は何でしょう？

WAZA-ALI

東北大学総合技術部 部内報 | 技あり

vol. 3

表紙：1970年頃に教職員が使用していた保護帽

編集：東北大学総合技術部
取材・文：上林晃子
デザイン・撮影：株式会社フロット
印刷：田宮印刷株式会社

発行日：2017年3月31日
発行：東北大学総合技術部
〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2丁目1-1
<http://web.tohoku.ac.jp/tech/>

© 東北大学総合技術部
2017 printed in japan



常時閉